



- ①接着強度用に使われる試験片（各種）
- ②トライボロジー会議でのPRコーナー
- ③めっき試験用の「ハルセル板掛治具」
- ④本社社屋外観

株式会社 エンジニアリングテストサービス



代表取締役社長
堀 了三さん

あらゆる試験片を 要望通りに提供

昭和59年の創業。試験片製作の専門メーカーとして「摩耗・摩擦・潤滑」「防錆防食」「接着」「塗料」「表面処理」「材料評価」などの試験片を製作し、企業や公的機関などの研究開発部門に提供しています。JIS（日本工業規格）などの標準試験片はもとより、あらゆる分野の試験片を「お客様の要望をおっしゃるとおりに行う」が当社のモットーです。多様なニーズに対応し、お客様の研究開発が円滑に進展されるよう、支援していきたいと思っています。

- 主な事業内容
研究開発用規格試験片製造販売
- 主な取引先（納入先）
化学総合メーカー、接着材料メーカー、塗料メーカー、プラントメーカー他

住 所 / 〒570-0043
大阪府守口市南寺方東通5-21-20
TEL / 06-6997-0798
FAX / 06-6997-0855
創 業 / 昭和59年1月
設 立 / 昭和63年6月
資本金 / 1,000万円
従業員 / 10名

[https:// www.engtests.co.jp/](https://www.engtests.co.jp/)

研究開発の最前線をサポート あらゆる試験片を提供

事業内容と沿革

自動車に着目した顧客開拓で発展

「エンジニアリングテストサービス（ETS）」は摩耗・摩擦や防錆防食、接着、塗料などのテストに使う試験片をJIS（日本工業規格）やASTM（米国材料試験協会）などの標準試験片のほか、材料の加工と併せ、顧客の多様な要望に応える試験片提供にあたっている。

昭和59年の創業当時から堀了三社長と杉立次夫専務が二人三脚で築き上げてきた会社。当初は塗料メーカーの調色に使うブリキや鉄板を切って納める仕事からスタートした。

やがて「1tの自動車には40kgの接着剤が使われている」との研究者の話を参考に路線を転換。拡大する自動車産業の市場性から接着材料メーカーの研究部門への営業開拓に重点をおき、試験片製作の受注を進めていった。自動車分野にかかわることで、塗料メーカーをはじめ提供先が増えるとともに、防錆や摩耗など試験項目の対象も増え、多様な企業や公的機関の研究者とのネットワークが事業の財産ともなっている。

強み

「うちの商品がない」 だからできる

各種の試験片の加工、提供を行う中で、売上高の構成では、全体のほぼ半分を接着・シーリングが占める。業種では自動車、建築関連用途が主力となっている。自社の強みについて堀社長は「変な言い方だが、うちの商品はない。お客様から『こうして欲しい』と言われたことをそのとおりにやり遂げることにある」と語る。接着材料メーカーの営業開拓を始めた当初から「バリをなくして」との要望には、従来のシャリング機で切っていた作業を杉立専務が独自に工夫したプレス機で抜く方法によって応え、注文では稀な「インコネル」や「ハステロイ」といったニッケル基合金の加工、提供にも迅速に対応している。

顧客という財産も強みといえる。「どこから当社を聞かれたのかはわからないが」と杉立専務が語るように、取引実績のないところからも注文が寄せられる。「ロコミ」によるものか。その中には宇宙開発や考古学の研究機関もあり、顧客からの情報提供を推察させる。

取り組み

研究者との “出会い”をつくる

新規開拓の難しさは本社にとっても同じ環境にある。そこで、研究者との新たな接点を求めて重視しているのが学会。例えば日本トライボロジー学会の研究発表の場となる、トライボロジー会議に参加している。トライボロジーとは摩擦、摩耗、潤滑の工学のこと。会議は春・秋の年2回開かれ、会場に設けられたブースで自らの事業や用途に応じた試験片などのPRにあたっている。研究者と直接話ができにくい現状にあって、研究者とのコミュニケーションが図れる貴重な場ともなっている。今後も他の学会も含めて、このような研究発表の機会を捉え、自社が提供できる情報を発信していく予定だ。

社内においては“トップ2人”が社員の採用には「ちゃんとした責任者がいる」と、一切タッチしない。トップダウンではなく、管理職や社員に信頼をおいた運営を通して個々の自主性を高めている。

今後の展開

ロボット化を検討

培ってきた加工技術を生かし、市場性を見据えた部材開発も強めている。めっきの性能試験に使う名刺サイズの銅板（試験規格名称ハルセル板）を取り付ける治具の開発を終え、受注に向け生産設備も整えた。銅板にはキズや油をつけないことも求められるが、その加工もすで実現させている。多くの数量を必要としない研究部門において、従来の治具では高価であったため、自社開発による安価な治具の提供で顧客の需要に応える。

自社設備については、ロボット導入の検討にも入っている。加工面ではバリ取りのロボット化を想定。また試験現場作業での使用を見込み、シミュレーション用に双腕ロボットの導入も視野に入れている。試験作業では試薬によって、作業者の健康面への影響から適切な使用・環境が求められるため、安全対策として、人に替わるロボットの活用が期待される。まず社内にロボットを導入して使用上の課題などを把握したい思いがある。